

## 南海小説の系譜におけるLouis Becke

著者	山本 卓
著者別表示	Yamamoto Taku
雑誌名	金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要
号	14
ページ	111-123
発行年	2022-03-17
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00065767">http://doi.org/10.24517/00065767</a>



# 南海小説の系譜における Louis Becke

山本 卓

## Louis Becke in the South Sea Literature YAMAMOTO Taku

### I イントロダクション

イギリスの週間文芸評論誌 *The Academy* 1897年12月11日号には、Fisher Unwin社のクリスマス商戦の全面広告が掲載されている。とりわけ目立つのは、人気の絶頂にあった John Oliver Hobbs の新作小説 *The School for Saints* (1897) で、紙面の4分の1を占める。その右に挿絵や写真の入った全集などが紹介される一方で、残りの部分には少し小さな文字で既刊書籍の作者とタイトルが列記される。そこには、Joseph Conrad や Somerset Maugham といった我々にも馴染みのある名前を見つけることもできるものの、Hobbsを含めてほとんどの作家は現在では忘れ去られている。そうした忘れ去られた作家の一人が、オーストラリア人の Louis Becke で、彼は太平洋を舞台にした物語を得意とした。デビュー作の *By Reef and Palm* (1894) で好評を博し、同年に死去した R. L. Stevenson の後継者とも囁かれたのである。

本論考では、Becke が数多くの太平洋物語を作り出した点に着目し、同様の物語を書いた他の作家との関係を探る。上に挙げた Conrad, Maugham, Stevenson はいずれも太平洋世界を題材にした作品を残しているし、その先駆者として Herman Melville にも遡ることができる。そうした太平洋文学の系譜において Becke の作品群の位置を同定する。最終的にこの試論が提起するのは、Becke のアナクロニズムである。時代錯誤的な作風と自己イメージの演出こそが、彼の作品を風化させたことを論じる。

### II Louis Becke とは何者か

20年余りの作家人生の中で長編小説、短編集、共同執筆を合わせて35もの著作を発表し、当時のベストセラー作家となったにもかかわらず、Becke の伝記や評論は限定的である。最も包括的な書籍である *Louis Becke* (1966) において、A. Grove Day は Becke を「太平洋のキプリング」(62) と表現する。Becke は1869年、14歳で兄と家を飛び出して船に乗り、途中に陸上の仕事に従事するものの、1892年にシドニーに帰郷するまで太平洋の島々を転々とした。しかしながら、船乗りや貿易商としては成功せず、シドニーで知人を介して *The Bulletin* の編集者と知己を得たことを契機に文筆活動を始める。しかも、最初に出版した短編集 *By Reef and Palm* で早々と成功を収めるのである。1895年1月6日に *The New York Times* に掲載された匿名書評はまさに手放しの絶賛といってよい。

None the less is Louis Becke a great man. This book of his is a little book, in more ways than one, yet from its pages there shines, clear, though faint, the light of genius, and to possess even a gleam of that light is enough for greatness. ...

It may be of course that the author of "By Reef and Palm" is only a man of talent; It may be that his South Sea stories owe as much to the absolute freshness of the material which his peculiar life has enabled him to gather as to his method of using that material.

The same thing was said of Kipling and many another now undoubted genius. As the matter of fact, however, it takes a genius to discover that new is new.

繰り返し登場する“genius”という言葉が評者の興奮を端的に表す。他方、Kipling との比較は類似した経歴によるところが大きい。Kipling がラホールの地方新聞社勤務の傍ら書き溜めたエキゾチックな物語によって、イギリス文壇の寵児として華々しく登場した一方で、Becke もまた、太平洋での生活の体験や伝聞を脚色した短編集によって鮮烈なデビューを飾ったのである。1896年にロンドンに渡った Becke が、Kipling, Conan Doyle, Mark Twain といった当時の名だたる作家と即座に親交を持つことができたのは、彼の作品が与えた衝撃を物語る<sup>1)</sup>。

他方、Becke の作家としての経歴を見返すとき、この書評においてすでに懸念が暗示されていることに気づく。「もしかすると“By Reef and Palm”の作者は才気煥発なだけかもしれない。ひょっとすると、この南海物語が素晴らしいのは(中略)題材自体が際立って目新しいことによるところが大きいかもしれない」という部分は、Becke の才能を強調するための修辞表現であるものの、以下に示す1906年の *The New York Sun* による *The Adventures of a Supercargo* (1906) についての書評と比較すると、皮肉にも未来を予見した文言として浮上する。

At a time when Stevenson had aroused a new craving for South Sea tales he showed that he had the knowledge and in his first short stories indicated that he had the ability to supply the demand. He has contented himself, however, with providing copy instead of developing his talent, and has fathered some pretty trashy stuff.

Becke が Stevenson が掘り起こしたジャンルの後継者とはなりえず、駄作を垂れ流したという

指摘はたいへん辛辣であるが、これは後の彼にたいする評価と大きく乖離しているわけではない。*Tales of the South Pacific* (1947) の作者で、Becke を高く評価した James Michener でさえ、このオーストラリア人作家の「視野と技巧の領域がきわめて狭い」(249) と認めている<sup>2)</sup>。Carter と Osborne によれば Becke の人気の絶頂は1901年ごろで、「20世紀も好意的な評価は続く一方で、評価の修正や『失望した』という評価も珍しいものではなくなってきた」(79) のである<sup>3)</sup>。

作品の評価の低下とともに、Louis Becke の人格も問題視される。小冊子 “Bully Hays, Louis Becke, and the Earl of Pembroke” (1914) において Saunders は *By Reef and Palm* の序文の信憑性について強い調子で非難する。

Then follows Becke's later life, the account of which is probably no more true than the foregoing.

It would be flattery to say Becke was inaccurate or a romance—he was mendacious. The bulk of the foregoing is untrue, and Becke shamefully used the Earl when he induced him to write the introduction to “Reef and Palm.” ...

The bulk of the story told by the Earl of Pembroke is fiction evolved from Becke's imagination. (4)

Saunders が訴えるのは、Becke が Pembroke 卿を欺いて、彼にとって都合が良い序文を書かせた疑惑である。Pembroke 卿はヨットや小型船舶での旅に没頭し、太平洋を航海した体験を *The South Sea Bubbles* (1872) にまとめて好評を博した。それゆえ彼は、太平洋生活を強調した作品の序文に、最もふさわしい執筆者だった。しかしながら、二人の間には面識はなく、Becke が提供した経歴だけに基づいて序文が書かれたため、伝記的な見地からの信憑性はきわめて低いのである<sup>4)</sup>。たとえば、1855年とされ

る Becke の誕生年は、彼の著作の内容によって変化し、その数は 4 種類にもわたる<sup>5</sup>。こうした自己像形成の正当性は議論の脈絡によってその是非が変化するものの、Saunders のように積極的に Becke の過去に疑いを投げかけた試みは、作家が抱えていた危うさを顕在化させる点で注目に値する。

言うまでもなく Becke の個人的な側面への関心は、先に言及した彼の作品の売り出し方に大きく起因する。海賊 Bully Hayes の元で働いていたなどの冒険的なエピソードは、作品世界の信憑性に貢献する一方で、作者の素性への不信も招くことになる。おそらく Becke 自身もそうした可能性を危惧していたはずで、Pembroke 卿の序文には「良き白人」としての彼の姿が散見される。たとえば、Bully Hayes との関わりについては、ある島の支配者として君臨していた Hayes に対して Becke は「激しい言い争い」をし、「島民は後者の方をきわめて懇ろに厚遇した」(13) と描写される。また、別の箇所にも、Becke の「良き白人」像を印象付けるかなり長い記述がある。

A bad attack of malarial fever, and a wound in the neck (labour recruiting or even trading among the blacks of Melanesia seems to have been a much less pleasant business than residence among the gentle brown folk of the Eastern Pacific) made him leave and return to the Marshall Islands, where Lailik, the chief whom he had succoured at sea years before, made him welcome. He left on a fruitless quest after an imaginary guano island, and from then until two years ago he has been living on various islands in both the North and South Pacific, leading what he calls “a wandering and lonely but not unhappy existence,” “Lui,” as they call him, being a man both liked and trusted by

the natives from lonely Easter Island to the far-away Pellews. (15)

冒頭の但し書きの部分は、Becke が自ら飛び込んだ商売にもかかわらず、当時太平洋で横行した奴隷売買が彼の本意ではなかったような印象を与える<sup>6</sup>。その印象は文を重ねるにつれてますます強くなっていく。「何年か前に海で助けた族長の住むマーシャル諸島で歓待を受」け、その後には渡り歩いた島々では「ルイ」と呼ばれて島民から愛されるという「良き白人」を体現する。しかしながら、こうした自己イメージの形成は無名の人物だからこそ可能になる方法であり、名前が知られるようになると必然的に疑惑を招く。Becke がそうした状況を見越した上で、あえて過去を粉飾したのかどうかは不明だが、Day が示すように、新進気鋭の作家として一定の成功を収めた後も、生活の困窮のために作品の版權を売ってしまい、さらに生活が不安定になるという悪循環には、彼の利他的な傾向が垣間見えてしまう<sup>7</sup>。すなわち、序文において Pembroke 卿に作らせた自己イメージも計算されたものではなく、むしろ間に合わせの発言の産物として浮上する。

ただし、Saunders のように厳しい視線を向ける批評家ばかりではなく、依然として Becke を擁護する見解も存在する。先にも挙げた、James Michener はその一人で、Bully Hayes と過ごした期間に関する Becke の矛盾した記載に寛大な態度をとる。

But Louis Becke was not a liar; he was a writer. And Bully Hayes was the hero of his red-letter days. From here on, in retelling the adventures of that youthful time, we shall not again question in niggardly manner what happened on the memorable cruise of the *Leomora*, for what Becke wrote in his various account of it was mostly true, and all who love the Pacific quickly fall within the spell of that robust episode.

## (264)

作家が語る物語と事実との齟齬に神経質になる必要はないとする Michener の考え方は、彼自身が南海物語の作家であることが影響しているのかもしれない。しかしながら、「太平洋を愛する者なら皆」という部分には、彼自身が読者の代弁をしているという自負が明確に示されている。Michener は Becke の視野や技巧の狭さを指摘するにもかかわらず、彼の人生の是非とは無関係な作品の魅力を主張するのである。

こうした二極化した Becke への評価は、彼の作品や彼自身の多義性を物語る。ここで我々は本論考の冒頭で提起した問いに回帰することになる。すなわち、Becke の作品が提示する太平洋像とそれを取り巻く文脈を検証することによって、彼の物語の源泉を探るという試みである。彼の物語の魅力はどこにあり、それは太平洋を舞台とした記録や物語の中でどのように位置づけるのか。それらを考えるにあたって、まずは太平洋の言説を振り返る必要があるだろう。

### Ⅲ 太平洋とその物語の発生(発見から19世紀中盤)

歴史を振り返るとき、太平洋を舞台とした文学作品はほぼ19世紀特有の現象とみなすことができる。16世紀初頭に Ferdinand Magellan が太平洋横断を成功させるものの、地勢や民族上の発見は乏しく、本格的な探検は Louis Antoine de Bougainville や James Cook が航海を試みた18世紀半ばに始まる。Bougainville による1766年から1769年にかけての世界一周、Cook の1768年から11年間にわたる3回の航海によって、太平洋世界の全貌がヨーロッパに明らかにされた。Bougainville の *A Voyage Around the World* (1771) はヨーロッパ中で話題になり、そこで示された伝統的な「高貴な野蛮人」のイメージは、Denis Diderot の“Supplement to Bougainville’s ‘Voyage’” (1772) の出版によって強化される。他方、Captain Cook の3巻の航海記は、Joseph Banks などの

科学者のスケッチや記録と相まって、より詳細な情報を提供した。彼らの持ち帰った知識によって、ヨーロッパは具体的な太平洋像を持つようになったのである。

彼らの航海記とともに太平洋世界を舞台とした現実的な物語も出現する。18世紀末の人々に最も影響力のあった物語テーマがバウンティ号での反乱である。その原型となったのは、William Bligh による *The Mutiny on Board H. M. S. Bounty* (1790) と *A Voyage to the South Sea* (1792) で、反乱の経緯と小型船でのティモールまでの漂流が語られている。しかしながら、生還した Bligh は冒険の英雄とはなりえず、指導者としての狭量さが戯画化される。その代わりに、Fletcher Christian のヒロイズム、新天地を求めての美しい現地女性との逃避行などのロマンチックな側面が、バウンティ事件の印象として一人歩きする<sup>8</sup>。

バウンティ物語が前景化するロマンチックな場としての太平洋世界の素地は、Bougainville や Cook によってすでに提供されていた。Bougainville の航海記には、非常に印象的な「男性にとって」甘美な場所としての太平洋像が刻印されている。

The piraguas were full of females; who, for agreeable feature, are not inferior to most European women; and who in point of beauty of the body might, with much reason, vie with them all. Most of these fair females were naked; for the men and the old women that accompanied them, had stripped them of the garments which they generally dress themselves in. ... The girl carelessly dropt a cloth, which covered her, and appeared to the eyes of all beholders, such as Venus shewed herself to the Phrygian shepherd, having, indeed, the celestial form of that goddess. (217-8)

裸の美女たちの一団が船に乗ってくるという事態は、ヨーロッパでは存在し得ない。しかも監視の目をかいくぐって船上に出現した女性は、天界の女神の姿をしている。ここに記録されているのは、まさに男性の楽園であり、探るべき価値がある場所なのである。

1797年から開始されるロンドン宣教師協会(LMS)の布教活動とそれに伴う宣教師の記録は、太平洋諸島についてのさらなる知識を提供した。島民たちのキリスト教への改宗は、当然のことながら彼らの価値観、とりわけ性にたいする考え方と食人の習慣の矯正を意味した。Cookの航海記においても言及されていた食人の習慣は、奥地へと踏み入る宣教師の活動とともに顕在化する<sup>9</sup>。1839年にLMSにおいて主導的な役割を担っていたJohn Williamsが、エロマンガ島で島民によって殺害され、その遺体が食べられてしまうという衝撃的な事件は、「ヨーロッパのみならず、太平洋のキリスト教関係者に途方もない衝撃を与えた」(120)<sup>10</sup>。太平洋世界は、食人種の住む楽園という極端な要素を併せ持つ場として、人々の想像力の中に根を下ろしていくのである。

*Typee* (1846)はこうしたヨーロッパ人の想像力に働きかけようとした、最初期の南海物語になる<sup>11</sup>。この物語も先に挙げたバウンティものに倣い、体験記という体裁で語られるものの、その内容の多くがMelvilleの創作である点で、それまでの航海記や宣教師の報告書とは大きく異なる<sup>12</sup>。物語が描くのは、食人族の村に迷い込んだ脱走船員が、美しいタイピー族の女性と享乐的な時間を過ごしつつも、食人族の犠牲になるかもしれないという、不安定な心理状態である。しかしその一方で、囚われの身の語り手が、島民とともに生活し彼らを観察するという人類学的な側面も併せ持つ。たとえば原始性や食人の習慣という民族特有の属性を保留しておき、西洋社会との共通領域を分析しようとする態度がそれに該当する。

And yet everything went on in the

valley with a harmony and smoothness unparalleled, I will venture to assert, in the most select, refined, and pious associations of mortals in Christendom. How are we to explain this enigma? These islanders were heathens! savages! ay, cannibals! and how came they, without the aid of established law, to exhibit, in so eminent a degree, that social order which is the greatest blessing and highest pride of the social state? (200)

語り手は社会秩序の維持の観点から、タイピー族の集団とキリスト教社会を比較する。非西洋の文化を引き合いに西洋文化を批判する手法は、ユートピア物語でしばしば用いられるし、DiderotもBougainville航海記の補遺の体裁を使って、同様の比較をおこなった。しかしながら、*Typee*はヨーロッパの欠点を過度に強調することはなく、他方、未開人を賛美することもない。最終的に物語は、白人の干し首を見つけて精神的恐慌状態に陥った主人公が真相を発見しないまま、命からがら村から逃げるという冒険譚に収斂していく。

冒険の舞台としての太平洋というモチーフは少年向けの物語に受け継がれる<sup>13</sup>。代表的な作品はR. M. Ballantyneによる*The Coral Island* (1857)で、ここには*Typee*の主人公が悩まされた未知のものへの不安や恐怖はほとんど存在しない。代わりに描かれるのは、見知らぬ世界での経験を驚きをもって楽しむ健全な少年たちの姿である。しかしながら、物語は前半と後半で、その雰囲気はかなり異なる。船の難破で南海の孤島に漂着した三人の少年たちを待っているのは、過酷な自然ではなく、穏やかな気候で衣食住が満ち足りた環境である。彼らは珊瑚礁に潜ってその美しさに目を見張り、森に自生するパンノキを味わい、手持ちの道具で魚を釣り上げる。島の探検によって地形を把握したのち、ついに豚を捕らえることに成功する。

物語の中盤までは、あたかも自然観察のフィールドワークに赴いているかのような印象を与えるのだ。

他方、後半になると物語は活劇へと一変する。食人族との戦いに始まり、海賊による捕囚と彼らの島民との貿易、海賊への食人種の襲撃、島からの脱出、宣教師との邂逅、島民のキリスト教への改宗、と太平洋における過去80年のヨーロッパ人の活動のパノラマが展開される。そこには西洋的な価値観についての疑いの眼差しもなく、西洋人の少年の潜在力が最大限に発揮される理想的な場なのである。翻っていえば、この屈託のなさこそが太平洋の知識の一般化の指標となる。1840年代の列強による太平洋諸島の植民地化を経て、もはや太平洋世界は魑魅魍魎の世界ではなくなった。そのかわり、キリスト教徒の少年が自らの良心に従いつつも、普通の束縛から解放されて自由に行動できる、野外学校となったのだ。

#### IV 様々な太平洋物語（19世紀末から20世紀初頭）

年少向けの物語の舞台となった太平洋物語に、再び現実性を付与しようとしたのが Stevenson である。1890年にサモアに移り住み、西洋に向けて太平洋を舞台にした作品を送り出した。その中には“The Bottle Imp”（1891）や“The Isle of Voices”（1893）といったファンタジーもあるが、“The Beach of Falesá”（1893）、*The Ebb-Tide*（1894）は太平洋地域における現実の白人の状況を描き出そうとする。その試みは“The Beach of Falesá”の最終場面における語り手の独白に鮮明に表れている。

My public-house? Not a bit of it, nor ever likely. I'm stuck here, I fancy. I don't like to leave the kids, you see: and—there's no use talking—they're better here than what they would be in a white man's country, though Ben took

the eldest up to Auckland, where he's being schooled with the best. But what bothers me is the girls. They're only half-castes, of course; I know that as well as you do, and there's nobody thinks less of half-castes than I do; but they're mine, and about all I've got. I can't reconcile my mind to their taking up with Kanakas, and I'd like to know where I'm to find the whites? (75)

物語の最後には西洋社会に帰還する *Typee* や *The Coral Island* の登場人物とは異なり、主人公 Wiltshire は島を離れることができない。ポリネシア人の妻との間にできた子供達のことを心配しているが、彼を最も悩ませるものは彼自身の人種差別的な考え方である。イギリスに帰りパブを開く夢は、太平洋で囚われの身になった語り手が、自らのイギリス人性を確認するための慰めにほかならない。冒険物語の体裁を取りつつも、もはやそこには食人種も海賊も不在で、戦う相手は同業の白人貿易商となる。そして、商売敵が消失したとたん、島民との暮らしの中でヨーロッパ人の主体のあり方に向き合わざるを得ない。Stevenson の南海物語は、太陽が降り注ぐ砂浜の光景とは裏腹に、太平洋を西洋人にとっての現実的な生活の場所へと変化させている。

その一方で、Stevenson が目撃した太平洋世界には、前時代的な非日常性も存在した。彼が居を構えたのは第一次サモア内戦の終結（1889）後だったが、依然としてドイツ、イギリス、アメリカが領有権をめぐる緊張状態にあり、大酋長の地位を巡って部族抗争が続いていた。彼はこの紛争に積極的に関与し、*The Times* には現地からの抗議状を送り、*A Footnote to History*（1892）と題する歴史書を執筆した。また、彼の当時の書簡には、不穏なアピアの雰囲気や彼自身の行動についての記載が目立つ。ただし、こうした彼の植民地紛争への深入りについては、Sidney Colvin が警告を送っていたに

もかわらず、それを聞き入れようとしなかったことも留意すべきだろう<sup>14</sup>。現地では重大問題かもしれないが、ヨーロッパでは数ある植民地の問題の一つに過ぎないという温度差を表すからである。この認識の隔たりこそが、太平洋が持っていた冒険の場という特権の喪失を意味する。事実、19世紀末には太平洋は観光定期船が行き交う日常の延長の場となっているのだ。

Stevenson の時代が終わる頃、太平洋をめぐって様々な作品が登場する。一つは旅行記である。Stevenson もアメリカから太平洋の船旅を *In the South Sea* (1896) にまとめているが、同様の作品は Jack London や Beatrice Grimshaw に受け継がれる。以前と異なるのは、19世紀末の太平洋にはもはや探検すべき場所がほとんど残っていないことである。London の旅の一部は先人の足跡を辿ることが目的で、*The Cruise of the Snark* (1911) おける *Typee* の章はその一例となる。他方、Grimshaw のようにさらに奥地へ分け入り、島民の習慣を報告しようとする試み（たとえば、*From Fiji to the Cannibal Islands* (1907)）もあるものの、別の見方をすれば、女性が単身で探検に赴けるほど太平洋は安全になったとも解釈できる。また、1891年タヒチを訪れた Paul Gauguin は、好ましくない形で西洋化されたパペーテの光景に失望し、島の奥にアトリエを建てるしかなかった。旅行記の話題の中心は、何を発見したかではなく、作者の目にどう映ったかであり、読者の関心も事実ではなく、書き手の体験や印象にある。

厳密には太平洋の周縁地域になるが、Joseph Conrad のマレー物語は、エキゾチックは環境そのものよりも登場人物の心理的側面に焦点を当てる。たとえば、“*The Lagoon*” (1896) は白人男性が、妻を得るために兄を裏切ってしまったマレー人 Arsat の話を聞くという物語である。そこで語られるのは殺戮や脱出という冒険ではあるが、物語の焦点は主人公の良心の呵責にある。さらにインドネシアを舞台とする長編小説 *Victory* (1915) は南国でのメロドラマ

の様相を呈するものの、事件が彼の目を通して描かれる心理小説となっている。すなわち、これらの作品が提示するのは、内面化された島の空間なのだ<sup>15</sup>。

他方、従来の冒険物語の定型となっていた西洋人と島民、もしくは西洋人同士の対立は、より一層、荒唐無稽な世界へと開かれる場合もある。Fulton と Hoffenberg の著書の副題が表すとおり「あらゆることが可能になる場所」としての太平洋である。H. G. Wells の *The Island of Doctor Moreau* (1896) の島に登場するのは、食人種や海賊ではなく科学者に改造された獣人間となる。太平洋物語の系譜においては、この物語は Stevenson の *The Ebb-Tide* との繋がりを指摘できる。冒頭に登場する酔っ払いの船長 John Davies は、酒で身を持ち崩す *The Ebb-Tide* の John Davis を想起させるし、西洋の生活が保障されている点では、Moreau の島も Attwater が支配する真珠島も同様である。注意したいのは、Wells は Stevenson の物語を単純なファンタジーとして置き換えたのではないことだ。両方の物語においては、主人公に迫る危険というよりも、彼らの心理状態が問題になるところも類似点として浮上する。*Victory* と *The Ebb-Tide* がしばしば比較されるように<sup>16</sup>、日常の場所となった太平洋の島で読者の興味を引くのは、そこに存在する平凡な登場人物の精神状態になる。

Somerset Maugham が太平洋を旅したのは、第一次世界大戦中の 1916 年である。古くから西洋人が移り住んだサモアやタヒチは、すでに観光の拠点となっており、定期船運行会社は欧米の観光客を呼び込むために様々な広告を打っていた<sup>17</sup>。Maugham もそうした旅人の一人で、“*Rain*” (1921) の主人公もまた同様である。

It was nearly bed-time and when they awoke next morning land would be in sight. Dr Macphail lit his pipe and, leaning over the rail, searched the heavens for the Southern Cross. After



two years at the front and a wound that had taken longer to heal than it should, he was glad to settle down quietly at Apia for twelve months at least, and he felt already better for the journey. Since some of the passengers were leaving the ship next day at Pago-Pago they had had a little dance that evening and in his ears hammered still the harsh notes of the mechanical piano. But the deck was quiet at last. A little way off he saw his wife in a long chair talking with the Davidsons, and he strolled over to her. (241)

「前線」という言葉が示すように、物語の中の時間は Maugham が太平世を旅した時期と一致する。そして、アピアは戦争で受けた傷を癒すための保養地として登場する。船上デッキで南十字星を見ながら燻らせるパイプや階下で鳴る自動ピアノなどは、まさにリゾート地へ向かう船旅の情景であり、そこには命懸けの戦闘も脱出も入る余地がない。また、物語に現地の人々はほとんど姿を見せず、事件の核心となる売春婦 Miss Thompson も白人である。すなわち、「Rain」の舞台は Thompson が逃げてきたサンフランシスコの猥雑な通りと大差ないようにみえる。アピアである必然性は、宣教師と売春婦との邂逅の可能性と長雨の気候だけで、そのほかの太平洋の特徴は物語の背後に消失している。

いうまでもなく、歴史を俯瞰するとき、太平洋は、ヨーロッパ人にとってより身近な現実性のある空間になってきた。しかしながら、すでに確認したように、太平洋世界についての物語は、そうしたベクトルとはやや異なる。西洋の作家たちは心理的に接近してくる太平洋に異なった題材を与えたり、それを眺める視座を変化させることによって、太平洋の新しい側面を見せようとしてきたのである。そうした流れの中で Becke の位置を探るにあたって、最も彼らしい世界が表象されている作品の一つと評価さ

れる、*By Reef and Palm* を取り上げる。

## V Becke の南海物語

Becke を人気作家に押し上げることになる *By Reef and Palm* につけられた最初の書名は、*Some White Men and Brown Women* だった<sup>18</sup>。この名前が示すとおりヨーロッパ人男性と島民の女性は、南海物語において最も頻出する組み合わせの一つであり、その取り扱いには作風の違いを明示する指標となりうる。たとえば、この短編集に収められた “Long Charley’s Good Little Wife” と Stevenson の “The Beach of Falesá” には、ともに貿易商とポリネシア女性との結婚を描いた場面がある。

“The Beach of Falesá” の貿易商 Wiltshire は、島に着くや否や妻にするための女性を物色し始める。

There was a crowd of girls about us, and I pulled myself up and looked among them like a Bashaw. They were all dressed out for the sake of the ship being in; and the women of Falesá are a handsome lot to see. If they have a fault, they are a trifle broad in the beam; and I was just thinking so when Case touched me.

“That’s pretty,” says he. ...

“Who’s she?” said I. “She’ll do.” ...

“I guess it’s all right,” said Case. “I guess you can have her. I’ll make it square with the old lady. You can have your pick of the lot for a plug of tobacco,” he added, sneering.

I suppose it was the smile stuck in my memory, for I spoke back sharp. “She doesn’t look that sort,” I cried. (5-6)

注目したいのは、最後の「彼女はそうは見えない」という部分である。それまではトルコのパシャのように女性を物色していたにもかかわらず、仲介者の Case に「タバコ一本でどうにか

なりますよ」と言われると、そうではないと反論する。皮肉にも、この反論が彼の行為の正当化に結びつかないことに Wiltshire は気づかない。ここで表現されているのは、近視眼的な白人貿易商の自尊心である。島民から妻を選ぶものの、その女性は彼の金が目当てではないと自分に言い聞かせることによって、キリスト教的な規範からの逸脱を否定しようとするのだ。

他方、Becke の物語での同様の状況は “The Beach of Falesá” とは対照的である。

Tirau came in timidly, clothed only in a *ridi* or girdle, and slunk into a far corner. ...

“Fine girl, Charley,” said the skipper, digging him in the ribs. “Ought to suit you, eh! Make a good little wife.”

Negotiations commenced anew. Father willing to part, girl frightened—commenced to cry. The astute Charley brought out some new trade. Tirau’s eye here displayed a faint interest. Charley threw her, with the air of a prince, a whole piece of turkey twill, 12 yards—value three dollars, cost about 2s. 3d. Tirau put out a little hand and drew it gingerly toward her. Tibakwa gave us an atrocious wink. (103)

ほんの十数行に島民の女性の変化が語られる。島民の女性らしく半裸の Tirau は、最初はおどおどとした様子で部屋の隅に行ってしまう。しかしながら、父親 Tibakwa と Charley との交渉の中で言及された交易品の話題に興味を示し始め、トルコ布によって貿易商の妻になることを承諾する。また、Tibakwa は、娘の求婚の受諾を計画通りという体で貿易商たちに微笑んでみせる。ここで描かれるのは、倫理が介在しない空間である。貿易商は物質的な快樂を妻に与え、彼女はそれに満足する。その一方で、彼女の父親は貿易商を一族に擁することによって、自らの力の拡大を図っている。Wiltshire が維持

しようとする白人としての自尊心はもはや存在せず、欲望に忠実で良心の呵責もない世界が開される。

“Tis in the Blood” は刹那的な欲望にたいする教育の無力さを描く。主人公のポリネシア女性は、ドイツ人のプランテーション経営者の妻になるために、幼い頃からキリスト教系の学校で教育を施され、無事に見目麗しい女性へと成長する。しかしながら、彼女は突然、美男の水夫長と駆け落ちし、結局は捨てられてしまう。美しい娘のことを諦めきれない経営者は求婚し続けるものの、彼女はそれを相手にしない。

The last time I saw her was in Charley the Russian’s saloon, when she showed me a letter. It was from the bereaved Oppermann, asking her to come back and marry him.

“Are you going?” I said.

“*E pule le Atua*” (if God so wills), “but he only sent me twenty dollars, and that isn’t half enough. However, there’s an American man-of-war coming next week, and these other girls will see then. I’ll make the *papalagi* officers shell out. *To fa, alii.*” (42)

トルコ布で目を輝かせていた素朴な島民の娘の欲望は、都会で西洋式の教育を受けた女性においては、さらに拡張する。「たった 20 ドル」や「白人士官の身包みを剥ぐわ」という包み隠さない台詞に西洋人の語り手は圧倒され、彼女にかける言葉もない。教育は彼女を洗練させたものの、それは持ち前の肉体的な魅力を強調し、物質的な欲望を満たすことに使われるのである。

こうした剥き出しの欲望は、“The Revenge of Macy O’Shea” の白人貿易商の場合、サディスティックな暴力へと向かう。物語は重婚を試みる O’Shea の結婚の顛末である。“Long Charley’s Good Little Wife” の貿易商と同様、Macy O’Shea も二番目の妻の父親には現金を与えており、全ては彼の思い通りになるはずで

あったが、正妻 Sera の嫉妬心を彼は考慮しなかった。その結果、婚礼の日に彼女は新しい妻を殺害し、O'Shea はその制裁を彼の妻に与えることになる。

The sight of the inanimate thing that had given no sign of its agony beyond the shudderings and twitchings of torn and mutilated flesh was perhaps disappointing to the tiger who stood and watched the dark stream that flowed down on both sides of the boat. Loloku touched his arm—"Mesi, stay your hand. She is dead else."

"Ah," said O'Shea, "that would be a pity, for with one hand shall she live to plant taro."

And, hatchet in hand, he walked in between the two brown women who held her hands. They moved aside and let go. Then O'Shea swung his arm and the blade of the hatchet struck into the planking, and the right hand of Sera fell on the sand.

A man put his arms around her, and lifted her off the boat. He placed his hand on the blood-stained bosom and looked at Macy O'Shea.

"*E mate!*" he said. (53)

衝撃的な幕切れは短編物語の常套手法であるが、この物語の最終場面はグロテスクで凄惨である。鞭を打ち据えて苦痛の声も出なくなったにもかかわらず、Sara にたいする私刑はより激しくなっていく。Loloku が「死んでしまいます」と訴えても、O'Shea は耳を貸さず、裏切りの事実を忘れさせないために、その痕跡を彼女の身体に残そうとする。ついには彼女の腕を切り落とすものの、正妻はすでに事切れている。重要なのは、作者がリンチの後の O'Shea を描いていないことだ。自分自身の行為に恐怖も後悔も O'Shea が持ち合わせてないことを、彼の不在が

物語る。Becke の描く白人もまた欲望の権化であり、南の島はさまざまな欲望がぶつかり合う劇場である。

Becke の物語の特徴はこうした「過剰さ」にある。前章で検証した Stevenson, Conrad, Wells, Maugham の南海物語には、Becke 的なグロテスクさはほとんど見当たらない。むしろ、彼らの物語の主人公は、自己の欲望や感情を制御し、いかにして西洋の規範から逸脱しないようにするかに腐心しているようにみえる。そうした物語と Becke の小編とを比較すると、後者の赤裸々さが際立つのである。ただし、歴史を振り返るとき、Becke 太平洋表象はけっして新しいものではない。すでに見たように、剥き出しの性は、Bougainville の航海記における鉄製品を求めて自らの肉体を水夫に提供するポリネシア女性によって体现されている。また、John Webber が描いた James Cook の殺害の場面は、絵画やエッチング画となって 18 世紀の人々に強烈な印象を与えた。Becke の作品が提示する太平洋は 19 世紀末をその舞台としているものの、剥き出しの性と暴力を強調する前世紀の描き方を思い起こさせるのだ。探検家達が太平洋世界を切り開いてからの 100 年余りの間に、西洋は布教、交易、植民地化などの過程を経て、様々な知識を蓄えてきた。そうした知識は太平洋世界を、夢想の世界から現実の世界に変えたが、その一方で、非現実の世界として太平洋イメージは生き残り、Becke はそれを作品の中に過剰な形で再現したのである。もちろん、Becke 自身の誇張した経歴が、彼の作品の世界観に説得力を与えたことは想像に難くない。しかしながら、Becke の才能で特筆すべきことは、現実の太平洋世界と非現実的な太平洋像との境界を見極めたことだろう。そして、少なくとも初期の短編集においては、境界線上近くの現実的な太平洋の領域で、可能な限りグロテスクで生々しい欲望が溢れる世界を提示してみせたのだ。

## VI 袋小路の Becke

最後に Becke の長編物語にも少し言及しておく。短編集で見せた生々しい太平洋表象は、長編ものにおいてはしばしば消失している。好評を得た *Edward Barry* (1900) は真珠採取人の主人公が海賊まがいの悪党に騙されて雇われ、彼らが企画した無人島での真珠採取と悪党一味からの脱出を成功させる物語であるが、グロテスクな場面はほとんど存在しない。物語に登場する太平洋諸島の部族や混血の船員は、おしなべて主人公に協力的であり、敵の手にかかりそうになる若い白人の未亡人を救い出す。最後には Barry と未亡人が結婚し、物語は大団円を迎える。すなわち、典型的な勧善懲悪の大衆ロマンスなのである。また、末期の冒険物語 *The Adventure of Louis Blake* (1909) も同様の傾向が見られる。題名からも分かるように、この物語は Louis Becke の自伝的色合いが濃い。その分、主人公の賢明さ、清廉潔白さの強調は、かえって物語を場違いなものにし、Ballantyne の少年冒険物語をそのまま大人向けにしてしまったかのような違和感がある。効果的な場面で物語を閉じることができるという短編物語の技巧を、長編物語では使いにくいという制約を考慮しても、彼の長編物語は凡庸な、時代遅れのヴィクトリア朝大衆小説の印象を拭えない。

Becke の短編物語は 19 世紀末のイギリスやアメリカの読者に衝撃をもたらした。しかし、歴史的には帝国主義の絶頂期を越え、世界の分割が完了しようとしている段階において、未だ人々が知らない世界を描き続けることは簡単ではない。Becke が Stevenson の後継者になれず、また Conrad のような微妙な心理描写に焦点を当てることもできず、Maugham 的な日常を拡張した太平洋世界を開拓できなかったのは、彼が見極めた現実と非現実の境界から、彼自身が抜け出せなかったことを示唆している。

## 註

<sup>1</sup> Day 47 頁。

<sup>2</sup> Michener 249 頁。なお、*Rascals in Paradise*

は Michener と Day の共著であるが、本論考においては Day の著作との混乱を避けるために、便宜的に Michener の著作として示している。

<sup>3</sup> Carter and Osborne 79 頁。

<sup>4</sup> Pembroke 卿による序文の信憑性の低さについては Day や Michener も指摘している。それぞれ 40-1 頁、259 頁を参照のこと。

<sup>5</sup> Michener 251 頁。

<sup>6</sup> 太平洋諸島における実質的な奴隷売買の横行については Stevenson の “The Beach of Falesá” の冒頭にも言及されており、20 世紀に入っても続いた。

<sup>7</sup> Day 49 頁を参照のこと。

<sup>8</sup> Sturma pp. 35-56 頁を参照。また Rennie はバウンティ号事件のロマン派への影響を指摘する (162-4)。

<sup>9</sup> Cook の航海記における食人の記録は 1773 年 11 月 23 日のものが最も知られている。“I now saw the mangled head or rather the remains of it for the under jaw, lip &c, were wanting, the scul was broke on the left side just above the temple, the face had all the appearance of a youth about fourteen or fifteen, a piece of the flesh had been broiled and eat by one of the Natives in the presence of most of the officers. The sight of the head and the relation of the circumstances just mentioned struck me with horror and filled my mind with indignation against these Canibals...” (293)

<sup>10</sup> Nicolas Thomas *Islanders* 120 頁を参照。

<sup>11</sup> 同時代の南海物語には James Fenimore Cooper の *The Crater, or Vulcan's Peak: a Tale of the Pacific* (1847) などが存在するが、物語の関心はロビンソン・クルーソー的な文明の建設にある。

<sup>12</sup> *Typee* の記述の信憑性については多くの疑義が呈されてきたため、本論考ではフィクションとして扱う。Northwestern 大学出版局版

の *Typee* に詳しい。“*Typee* was, in fact, neither literal autobiography nor pure fiction. Melville drew his material from his experiences, from his imagination, and from a variety of travel books when the memory of his experiences failed him or when his personal observations were inadequate. He had been in the valley for no more than four weeks instead of the four months to which he had publicly committed himself, and he had been a naive and inexperienced observer who was probably not to form his opinions concerning the relative merits of savagery and civilization until he had been exposed to more striking contrasts in Tahiti and Hawaii.” (291)

- <sup>13</sup> Charles Ferrall と Anna Jackson によれば、少年向け物語は 1850 年代に出版され始め、1870 年の教育法の制定の頃に隆盛を極める。*Juvenile Literature and British Society, 1850-1950* 5 頁を参照。
- <sup>14</sup> Stevenson のサモア問題への執着は 1894 年 3 月の手紙からも伺うことができる。“Dear Colvin, please remember that my life passes among my ‘blacks or chocolates.’ If I were to do as you propose, in a bit of a tiff, it would cut you off entirely from my life. You must try to exercise a trifle of imagination, and put yourself, perhaps with an effort, into some sort of sympathy with these people, or how am I to write to you? I think you are truly a little too Cockney with me.” (121)
- <sup>15</sup> エキゾチックな場面設定の作品を書いた点で Conrad と Becke は共通していたものの、作品の販売部数は Becke の方が多かった。1896 年 8 月 9 日に Conrad が Unwin に宛てた手紙には Becke の小説の好調な売上げを羨む文言がある。“I am sorry to miss making the acquaintance of Mr Becke.

Strangely enough I have been, only the other day, reading again his *Reef and Palm*. Apart from the great interest of the stories what I admire most is this perfect unselfishness in the telling of them. The sacrifice of his individuality in the interest of the work. He stands magnificently aloof from the poignancy and humour of his stories. A thing I could never do—and which I envy him. I haven’t seen yet the First Fleet Family and have a great curiosity.” (298)

- <sup>16</sup> Cedric Watts および Bradshaw を参照。
- <sup>17</sup> The Burns, Philip Company は 1880 年代から太平洋諸島向けの観光ツアーを企画した。広告や独自の小冊子 (*Picturesque Travel, 1811-25*) によって、広く観光客を募った。
- <sup>18</sup> Tiffn 163 頁。

#### 参考文献

- Ballantyne, R. M. *The Coral Island*. Oxford UP, 1990.
- Becke, Louis. *The Adventures of Louis Blake*. 1909. Werner Laurie, 1913.
- . *The Adventures of a Supercargo*. Fisher Unwin, 1906.
- . *By Reef and Palm*. Lippincott, 1895.
- . *The Ebbing of the Tide*. Lippincott, 1896.
- . *Edward Barry: South Sea Pearler*. Nelson, 1900.
- Bligh, William. *The Mutiny on Board H. M. S. Bounty*. Airmont, 1968.
- . *A Voyage to the South Sea*. New American Library, 1961.
- Bradshaw, Anne. “Joseph Conrad and Louis Becke.” *English Studies*, vol. 86, no. 3, 2008, pp. 206-25.
- Bougainville, Louis de. *A Voyage Round the World*. Trans. John Forster. 1772. Da Copa P., 1967.
- Conrad, Joseph. *The Collected Letters of Joseph Conrad: 1861-1897*, edited by Frederick Karl, et. al., vol. 1. Cambridge UP, 1983.
- . “The Lagoon.” 1898. *The Collected Edition of the Works of Joseph Conrad*. Dent, 1967.

- . "Victory." 1915 *The Collected Edition of the Works of Joseph Conrad*. Dent, 1967.
- Cook, James. *The Journals of Captain James Cook on His Voyages of Discovery*, edited by J. C. Beaglehole, Boydell Press, 1999.
- Cooper, James Fenimore. *The Crater or Vulcan's Peak: A Tale of the Pacific*. Townsend, 1861.
- Day, A. Grove. *Louis Becke*. Twayne, 1966.
- Ferrall, Charles and Anna Jackson. *Juvenile Literature and British Society 1850-1950: The Age of Adolescence*. Routledge, 2010.
- Fulton, Richard and Peter Hoffenburger, ed. *Oceania and the Victorian Imagination: Where All Things Are Possible*. Ashgate, 2013.
- Grimshaw, Beatrice. *From Fiji to the Cannibal Islands*. Eveleigh Nash, 1907.
- London, Jack. *The Cruise of the Snark*. Macmillan, 1911.
- Maugham, W. Somerset. *The Trembling of a Leaf: Little Stories of the South Sea Islands*. Doran, 1921.
- Melville, Herman. *Typee: A Peep at Polynesian Life*, edited by Harrison Hayford, Northwestern UP., 1968.
- Michener, James A and A. Grove Day. *Rascals in Paradise*. Random House, 1957.
- Rennie, Neil. *Far-fetched Facts: The Literature of Travel and the Idea of the South Seas*. Oxford UP, 1995.
- Saunders, A.T.. "Bully Hayes, Louis Becke, and the Earl of Pembroke." Pamphlet. 1914.
- Stevenson, Robert Louis. "The Beach of Falesá." 1893. *The Works of Robert Louis Stevenson*, edited by Lloyd Osbourne and Fanny Stevenson, vol. 13. Heinemann, 1924.
- . "The Ebb-Tide." 1894. *The Works of Robert Louis Stevenson*. Ed. Lloyd Osbourne and Fanny Stevenson, vol. 14. Heinemann, 1924.
- . "A Footnote to History." 1892. *The Works of Robert Louis Stevenson*, edited by Lloyd Osbourne and Fanny Stevenson, vol. 21. Heinemann, 1924.
- . "The Letters of Robert Louis Stevenson." vol. 5. *The Works of Robert Louis Stevenson*, edited by Lloyd Osbourne and Fanny Stevenson, vol. 35. Heinemann, 1924.
- Sturma, Michael. *South Sea Maidens: Western Fantasy and Sexual Politics in the South Pacific*. Praeger, 2002.
- Thomas, Nicholas. *Islanders: The Pacific in the Age of Empire*. Yale UP, 2012.
- Thomas, Nicholas., and Richard Eves. *Bad Colonists: The South Seas Letters of Vernon Lee Walkers and Louis Becke*. Duke UP, 1999.
- Tiffin, Chris. "Louis Becke, *the Bulletin* and *By Reef and Palm*." *Kunapipi*. vol. 34, no. 2, 2012, pp. 163-9.
- Watts, Cedric. "The Ebb-Tide and Victory." *Conradiana*. vol. 28, no. 2, summer 1996, pp. 133-7.
- Wells, Herbert George. *The Island of Dr. Moreau*. Heinemann, 1917.